

談話の構築と領域

東郷雄二

1. はじめに

自然言語の意味解釈においては、領域 (英 domain / 仏 domaine) が重要な役割を果たすことはしばしば指摘されてきた。例えば真理条件意味論に基づく確定記述の解釈について、Russell (1905) が提案した分析は次のようなものである。

(1) The professor is drunk.

$$\exists x [\text{professor}(x) \wedge \neg \exists y (\text{professor}(y) \wedge x \neq y) \wedge \text{drunk}(x)]$$

Russell の分析では、確定記述の本質は「唯一性」であり、上の論理式は「酔っている教授がただ一人存在する」ことを表わしている。しかし、これだけではもちろんこの式は真ではない。世界中に同じ時点で酔っている教授はたくさんいるはずだからである。例文(1)が真となるのは、例えば次のような文脈においてである。

(2) We went to the party held at King's College last night. There were one professor and ten students in linguistics. The professor was drunk.

先行文脈で「昨晚キングズ・カレッジで開かれたパーティー」と、時間・空間的に限定された場には、教授はひとりしかいないので、確定記述 the professor は唯一性条件を満たし、(1) の式は真となる。述語論理では、このように限られた個体が含まれるように限定された場のことを、談話領域 (universe of discourse) と呼ぶ。このとき談話領域は世界の部分集合である。例文(1) は世界全体について成り立つのではなく、その一部である限定された談話領域についてのみ真となる。

適切な意味解釈のために領域を考慮しなくてはならないのは、確定記述だけではない。量化子もまた同じである。Recanati (1996)は、自然言語における量化子は、しばしば暗黙のうちに制限されていると指摘する。

(3) [自宅が泥棒に入られた話をして] The burgler took everything.

(4) Most students came to the party.

例文(3) の everything は、もちろん世界中のすべての物ではなく、「話し手の自宅」という領域制限を談話的・語用論的に受けている。例文(4) も世界中の学生の大部分ではなく、例えば「私のクラス」という領域制限がある。

ここまでは確定記述と量化子という、名詞句の意味解釈に深く関わる例を見た。しかし領域の制限はそれだけではなく、私たちの言語の使用の全域にわたって重要な役割を果たしている。例えば「出来事の生起」の意味解釈である。Reinhart (1983)の次の例を見てみよう。(5)a. では Rosa と she は同一指示解釈できるが、(5)b.ではできない¹⁾。

- (5) a. In Ben's picture of Rosa, she is riding a horse.
b. *In Ben's picture of Rosa, she found a scratch.

Reinhart は構成素統御の概念を用いて、ふたつの文の構造的ちがいをもとにこの現象を説明しようとした。しかし意味解釈の観点から見れば、このちがいの原因は文が解釈される「世界」のちがいである。(5)a. では主文 she is riding a horse は「絵の中に描かれた世界」の出来事であり、一方 (5)b. では she found a scratch は「絵の外の現実」の出来事である。このように、前置された状況補語 in Ben's picture of Rosa と主文とのあいだの、世界の連続・断絶の別が、she による同一指示照応の可否を支配している²⁾。

このように、文が「どのような世界と相対的に解釈されるか」という問題は、上に見た確定記述や量化子の意味解釈に必要な「領域」の問題と融合することができる。自然言語の意味解釈における「領域」の役割は広く深い。ところが現在までの言語研究においては、「領域」の果たす役割はあまり注目されてこなかった。多くは語用論の問題として片付けられてきたきらいがある。本稿ではこの問題のすべてを扱うことはできないが、いくつかの事例研究を通じて、自然言語の意味解釈において「領域」の果たす役割を明らかにしたい。

2. 「存在」と領域

「領域」の問題が最も顕在化するのは存在文である。なぜなら、「存在する」とは「どこかに存在する」ことであり、それ以外の有り様はないからである。存在文における「領域」とは、その存在が陳述される事物の「存在領域」となる。

Cannings (1978)はフランス語の *il y a* 構文の分析を通じて、この点に迫ろうとした。Cannings によれば、*il y a* 構文に不定名詞句が生じるときは、次の三つの解釈がある。

- (6) Il y a un Père Noël.

a. ontological reading 存在読み

I learned that there is a Santa Claus. I learned that in my class of philosophy.

b. presence reading 現前読み

Look ! There is a Santa Claus. I didn't think that I would see one in a place like this.

c. specificational reading 指定読み

What do you see in my drawing? — There is a Santa Claus, but except for that I didn't see anything of importance.

ところが不定名詞句を定名詞句に入れ替えた次の文には、「現前読み」と「指定読み」しかない。「存在読み」は不可能になる。

(7) Il y a le Père Noël.

Cannings はなぜ定名詞句にすると「存在読み」がなくなるかを説明するために、文の意味解釈には、その意味解釈を支える domain of relevance が必要だとした³⁾。存在文に限らずあらゆる文には、それとペアをなす domain of relevance がある。文を S とし domain of relevance を W_x とすると、あらゆる文は $\langle S, W_x \rangle$ のペアとして解釈される。このとき domain of relevance W_x は、文 S を入力とし、真偽値を出力とする関数であると定義できる。つまり $W_x(S) = \{0, 1\}$ となる。また domain of relevance には、そのなかに含まれる個体の集合である「個体領域」 D_w がある。 D_w は W_x の部分集合である ($D_w \subset W_x$)。このような前提のもとに Cannings は次のような *il y a* 構文と定名詞句の解釈規則を提案する。

(8) *il y a* 構文の解釈規則

a. Rule 1 : *il y a* NP

Term x , having the reading of NP exists relative to W_x , the domain of relevance to which the S is paired.

b. Rule 1' : *il y a* NP

Term x , having the reading of NP belongs to D_w : $x \in D_w$.

(9) 定名詞句の解釈規則⁴⁾

Rule 2 : *le N(x)*

Everything in some domain of relevance having the reading $N(x)$: $\forall x \in D_j (Px)$ (where P is the reading of $N(x)$)

定名詞句に「存在読み」がない理由は、Griceの格率をもとにした次の制約で説明される。

(10) Given Grice's maxim of Quality, $D_j \neq D_w$, or the sentence is uninformative.

規則(9)は $le N$ を D_j に存在するすべての N と規定する。もし D_j が "Il y a le Père Noël." を解釈する domain of relevance である D_w と同一だとしたら、「 D_w に存在するものは D_w に存在する」を意味することになる。これは同語反復であり情報価値がない。これが "Il y a le Père Noël." に「存在読み」がない理由だという主張である。

これだけならば Cannings の提案にそれほど新味があるとは言えないが、本稿にとって重要なのは、"Il y a le Père Noël." に依然として「現前読み」と「指定読み」が可能なのはなぜかという点である。このうち「指定読み」は、(6)c. に示されている状況では、「絵に描かれているもの」のリストを指定する「リスト文」であり、ここでは触れない⁵⁾。重要なのは「現前読み」である。

「現前読み」では、le Père Noël が解釈される個体領域 D_j は最大領域 D_w ではなく、場所と時間パラメータにより限定された「発話現場」という狭い領域である。これを D_k と書くと、 $D_k \subset D_w$ である。存在量子は保存的なので、狭い領域で存在が成り立てば、それより広い領域でも存在が成り立つ。しかしその逆は成り立たず、広い領域で存在するからといって狭い領域で存在するとは限らない。だから狭い領域である D_k と相対的に解釈される "Il y a le Père Noël." は、Grice の格率に違反せず情報価値がある。これが「現前読み」が可能な理由である⁶⁾。

3. 「領域」と「場所」

定名詞句が解釈される個体領域 D_w よりも狭い時空間が文により設定されていれば、il y a 存在文の「現前読み」が可能かということ、実はそれほど単純な話ではない。次は文中に空間的限定を担う場所句 dans ma chambre があるにもかかわらず「現前読み」はできない。かといって「指定読み」もできないので、結果として非文となる。

(11) *Il y a le Père Noël dans ma chambre.

これなぜだろうか。Regarde ! Il y a le Père Noël. においては、「発話現場」が文が意味解釈される「領域」として働き、 $\langle S, D_k \rangle$ というペア解釈ができた。なぜ例文 (11) で場所を指定する dans ma chambre は同じように働かないのだろうか。

それは dans ma chambre は「場所」(location)ではあるが、「領域」(domain)ではないからである。「場所」は文中において、特定の事物が見いだされたり、出来事が生起したりする地点を指示する。この意味で「場所」は文に含まれるものである。一方、「領域」は逆に文を含むものであり、文全体の真偽が吟味される世界を指定する。だから「領域」は文の意味解釈が始まる前に、談話的・語用論的に既に指定されているか、文の意味解釈の過程の早い段階で指定する必要がある。少なくとも談話世界に指示対象が導入される前に設定されていなくてはならない。このことを英語の there 構文を例に取って見てみよう。

Milsark (1974)以来、be 動詞以外の動詞を持つ there 構文を、動詞句内存在文 (inside verbal existential) と動詞句外存在文 (outside verbal existential)に区別するのが一般的である。

(12) 動詞句内存在文

- a. There arose a storm here.
- b. There emerged several new facts at the meeting.

(13) 動詞句外存在文

- a. There lurched into the room an old man.
- b. There swam towards me someone carrying a harpoon.

ふたつのタイプの存在文のあいだには、次のようなちがいがあるとされている (Milsark (1974), Lumsden (1988), Rochemont & Culicover (1990), 久野・高見 (2002)).

(A) there 構文に生じる名詞句を「実主語」と呼ぶことにすると、動詞句内存在文では実主語は VP 内にあり、動詞句外存在文では VP の外にある。このため、動詞句外存在文では、実主語を左に移動することができない。

- (14) a. *There lurched *an old man* into the room.
b. *There swam *someone carrying a harpoon* towards me.

(B) 動詞句内存在文では、場所句は文末に生じることが多いが、文頭に移動することもできる。一方、動詞句外存在文では、場所句は動詞の直後に置かれ、移動することはできない。

- (15) a. There arose a storm *here*. (動詞句内+場所句は文末)

b. *Here*, there arose a storm. (動詞句内+場所句は文頭)

(16) a. There lurched *into the room* an old man. (動詞句外+場所句は動詞の直後)

b. **Into the room*, there lurched an old man. (動詞句外+場所句は文頭)

(C) 動詞句内存在文で許される動詞は、非対格動詞に限られる。一方、動詞句外存在文では、非対格動詞に加えて非能格動詞も可能である。

(17) a. There *emerged* several new facts at the meeting. (動詞句内+非対格動詞)

b. *There *walked* an old lady in the garden. (動詞句内+非能格動詞)

(18) a. There *appeared* in front of us a mysterious man. (動詞句外+非対格動詞)

b. There *walked* through passport control a well-known actor. (動詞句外+非能格動詞)

(D) 動詞句内存在文にはいわゆる定性制約があり、定名詞句は実主語として生じることができない。動詞句外存在文には定性制約がなく、定名詞句も生じることができる。

(19) a. *There arose *the storm* here.

b. *There emerged *these new facts* at the meeting.

(20) a. There flew through the window *that shoe* on the table.

b. Thereupon, there ambled into the room *my neighbor's frog*.

上に述べた「場所」(location)と「領域」(domain)のちがいにに関して重要なのは、(A)と(B)の特徴である。動詞句内存在文 *There arose a storm here.*において、場所句 *here* は「場所」を表わし「領域」ではない。この文は「嵐が発生した」という出来事を述べ、その出来事が生じた場所は *here* であったと指定しているのである。このように、「場所」は出来事に対する付加的情報として扱われるので、実主語 *a storm* が存在文によって談話世界に導入された後、つまり文末に生じることができる。*There arose a storm here.*という文は、*There arose a storm.*を S とし、*here* を domain of relevance W_j として $\langle S, W_j \rangle$ というペア解釈を受けるのではない。 S がそれと相対的に解釈されるべき W_j は *here* ではなく、例文では表現されていないが、この文が発話される状況・文脈により語用論的に設定される。だから、「ここで嵐が発生した」という命題は、語用論的に設定された domain of relevance W_i と相対的

にその真偽を判断されることになる。

一方、動詞句外存在文 *There lurched into the room an old man.* では、場所句 *into the room* は「場所」ではなく「領域」である。*There lurched an old man.* を S とし、*(into) the room* を W_j とすると、文全体は $\langle S, W_j \rangle$ というペア解釈を受け、*(into) the room* は存在文の真偽が判断される *domain of relevance* として働く。つまり、「老人がよろめきながら入って来た」という命題は、 $W_j = \text{(into) the room}$ という「領域」すなわちミニ世界に関してその成立の可否が問われるのである。このとき「領域」を表わす場所句 *into the room* は、単に出来事が生起した地点を追加的情報として付け加えるのではなく、比喩的に言えば「出来事が生起する枠組み」としての「世界」を指定する。このため動詞句外存在文では、実主語の指示対象が談話内に導入されるまでに、「枠組みとしての世界」を設定する必要がある⁷⁾。実主語の指示対象は、このように設定された世界に導入されるので、統語的には文末に生じる必要があるのである。

さて、このように考えるとひとつ問題が生じる。例文(15)が示すように、動詞句内存在文では、ふつう文末に付加的情報として生じる場所句を文頭に置くことができるという点である。場所句を文頭に置いた *Here, there arose a storm.* では、場所の設定が実主語の指示対象の導入より前に行なわれているので、結果的に動詞句外存在文の順序と同じになる。では場所句を文頭に置いた動詞句内存在文は、動詞句外存在文と同じ意味解釈の過程を経るのかという点が問題となるのである。

文 S とその *domain of relevance* W_j のペア解釈 $\langle S, W_j \rangle$ という Cannings の基本的アイデアは正しいのだが、足りないものがある。このため Cannings のアイデアだけでは、すぐ上で指摘した問題点を正しく扱うことができない。では何を付け加えればよいだろうか。

4. 時空変数付きの「領域」と存在文

よく知られているように、*Here, there arose a storm.* のように前置された場所句 *here* は、談話・機能文法では主題 (*thème*) とされることがある。この場合の「主題」とは、「文の命題が成立する時間・空間的枠組み、もしくは個体を指定する要素」と定義できる。つまり命題 *There arose a storm.* は主題 *here* 「に関して」(*about*) 真であるとされる。

また同じ要素はメンタル・スペース理論においては、「スペース導入表現」(*space builder*) と呼ばれている。次例の文頭の要素は「スペース導入表現」であり、それぞれ「絵画スペース」「演劇スペース」「過去スペース」を導入するとされる。

- (21) a. *In Len's picture*, a witch is riding a unicorn.
 b. *In that play*, Othello is jealous.
 c. *In 1929*, the lady with white hair was blonde.

これらの要素は確かに、「文がそれと相対的に真偽を判断される世界」を指定しており、この意味では本稿で言う「領域」に相当すると考えざるを得ない。例えば(21)a.では、文(引く *in Len's picture*) S は、 $W_j = \text{Len's picture}$ を domain of relevance として、 $\langle S, W_j \rangle$ というペア解釈を受ける。 $W_j(S)=1$ であり、それ以外では偽である。

しかし、ここでは文頭の前置詞句などが指定する「世界」の性質をもう少し詳しく検討する必要がある。*Here, there arose a storm.* を例にとると、 $S = \text{there arose a storm}$ は場所句 *here* に関して「時間に関係なく真」であることに注意したい。ただし、嵐が起きた時点より前の時間はもちろん除く。嵐が起きた時点を t_1 とすると、 $t_1 < t_j$ であるすべての t_j について真である。わかりやすい例で説明しよう。*Here, Wellington defeated Napoleon.* を例に取り、*here* は *Waterloo* をさすとする。*Waterloo* の戦いは 1815 年に起きている。問題の文を観光ガイドが発話すると仮定すると、ガイドはこの文を 1960 年に発話しても、2004 年に発話しても、文は真である。場所句 *here* に時点を表わす指標を付けてみると、問題の文は *here <1960>* ついても *here <2004>* についても成り立つ。指標が 1815 年以後であれば、文は「時間に関係なく真」なのである。ということは、場所句 *here* には時間の指標が付いていないのと同じである。言い換えれば *here (=Waterloo)* に関して、「ウェリントンがナポレオンを破った」ということは、時間に関係なく *Waterloo* に関する「習慣的特性」として成り立つのである⁸⁾。メンタル・スペース理論で「スペース導入表現」とされる表現の多くについても同じことが言える⁹⁾。例えば、*In that movie, a former quarterback adopts needy children.* において、命題 *a former quarterback adopts needy children* は問題の「映画全体」について成り立つのであり、例えば「映画の始まりから 15 分後」という映画のなかの特定の時点 t_1 について成り立つのではない。このような「世界」を「時空変数なしの領域」(non-situated domain) と呼んでおく。

一方、動詞句外存在文 *There lurched into the room an old man.* では事情がまったく異なる。この文では場所句 *into the room* が指定する領域に関して、文 $S = \text{There lurched an old man.}$ は、「時間に関係なく成り立つ」わけではなく、*There lurched an old man.* という出来事 (=E) が起きた時点においてしか成り立たない。出来事には時空変数が付随するので、 $E(t_1)$ と書く。 t_1 において *the room* は、「老人がよろめきながら入って来た部屋」なのだが、 t_1 以外の時点 (例えば t_1 から 5 分後) において

は「老人がよろめきながら入って来た部屋」ではない。Waterloo が 1815 年以後のいつの時点においても「ウェリントンがナポレオンを破った場所」であるのと対照的であることに注意されたい。

これを形式的に扱うために、「時空変数付きの領域」(situated domain) という概念を導入しよう。動詞句外存在文に次の論理式を提案する。s は時空変数で、イベント意味論におけるデビッドソン項と同じ働きをすると考えてよい。

(22) There lurched into the room an old man.

$$\exists s \exists x (\text{into-the-room}(s) \wedge \text{lurch}(x, s) \wedge \text{old-man}(x, s))$$

この式は概略、「時点 s において老人である x が、時点 s において部屋の中に入ってきたような s と x が存在する」を意味する。この式で into-the-room (s) の部分が、それと相対的に命題の真偽が判断される「領域」を指定する。名詞述語 old-man が時空変数を取ることは東郷 (2002) を参照。ここでは「領域」を表わす into-the-room (s) が時空変数を取ることが重要である。時空変数は上の式のすべての述語に含まれており、「部屋であること」「老人であること」「よろめきながら入ること」が同一時点 s において、そしてその時点においてのみ成り立つことを保証している。

時空変数の働きを別の言葉で説明すると、Carlson (1977) が提案した kind/object / stage の三段階の存在論において、object から stage を切り出す働きだと言える。object (ex. John, this house) は時間に関係しない永続的な存在であるが、stage は object の時間的切片であり、一時的な存在である。

(22) の論理式で場所句 into the room が時空変数を取り into-the-room (s) と記述されるということは、これが object としての「部屋」を表わしているのではなく、stage としての「部屋の時間的切片」を表わしているということを意味する。このような性質を持つ領域を本稿では「時空変数付きの領域」(situated domain)と呼ぶ。

これに対して、動詞句内存在文で場所句が文頭に置かれているとき、その場所句は時空変数を取らない。だから下の論理式で、here は $\exists s$ に束縛されておらず、存在量化子のスコープ内にはない¹⁰⁾。

(23) Here, there arose a storm.

$$\exists s \exists x (\text{here} \wedge \text{storm}(x, s) \wedge \text{arise}(x, s))$$

(23)を例えば天気図のなかである地点を指さしながらの発話だと仮定しよう。

here が時空変数を取らないことは、次の例文で確かめることができる。

(24) Here, there arose storms one after another.

次々と嵐が発生しているのだから、here は複数の出来事が生じた場所を表わし、単一の時空変数 s に束縛されているわけではない¹¹⁾。一方、動詞句外存在文では時空変数付き領域 into the room は単一の時空変数に束縛されているので、複数回の出来事の生起を意味する one after another を付加した次の文は容認されない。

(25) a. *There lurched into the room old men *one after another*.

b. * There lurched into the room *one after another* old men.

5. 「時空変数付き領域」における定名詞句の解釈

このように考えれば、なぜ動詞句内存在文では許されない定名詞句の実主語が、動詞句外存在文では許されるのかをうまく説明することができる。

(26) *There arose *the storm* here.

例文(26)を S と置くと、この文はなんらかの domain of relevance W_j と相対的に $\langle S, W_j \rangle$ のペア解釈を受ける。Cannings の解釈規則(9)により、定名詞句 the storm は W_j の個体領域 D_w に含まれるすべての(唯一の) storm をさす。文 S は domain of relevance W_j と相対的に解釈されるが、その個体領域は D_w であり、結局(26)は「 D_w にあるものは D_w にある」を意味することになり、Grice の格率に照らせば情報価値がなくなるので不適格文となる。ここまでは Cannings の説明の復習である。

では動詞句外存在文では、なぜ定名詞句の実主語が許されるのか。ここでは次のような論理式を提案することで説明を試みよう。

(27) Thereupon, there ambled into the room *my neighbor's frog*.

$\exists s \exists x (\text{into-the-room}(s) \wedge \text{amble}(x, s) \wedge \text{my-neighbor's-frog}(x, s))$

ふつう my neighbor's frog のような定名詞句は、「個体」individual を表わすとされているので、my neighbor's frog = MNF と置くと MNF は変数ではなく定数で、演算子には束縛されないと考えられている。従って、仮に本稿のように例文(27)に時空変数を認める立場を採っても、次のように表記されることが多い。

(28) $\exists s (\text{into-the-room}(s) \wedge \text{amble}(\text{MNF}, s))$

これは「個体 MNF が部屋にのっそり入って来た時点 s が存在する」を意味するが、Carlson の存在論を支持する立場から言うと、これは正しくない。正しくは「時点 s において部屋にのっそり入って来た個体 MNF の stage が存在する」でなくてはならない。つまり部屋に入ってきたのは、個体 *my neighbor's frog* ではなく、その時間的切片 (=stage) なのである。Carlson の理論では個体から stage を切り出すには、実現関数 (realization function) が使われているが¹²⁾、表記がかなり煩瑣になるので、(27)では便宜的に個体 MNF が不定名詞句であるかのような記法を採用している。(27)の式のなかの $\exists s \exists x (\text{my-neighbor's-frog}(x, s))$ の部分が、時点 s においてスライスされた MNF の stage x を表わしていると考えていただきたい。ひとつの個体からは時点に応じて複数の stage を切り出すことができるので、個体はいわば「不定名詞句化」して存在量化子の束縛を受けることになる。このことは、例えば個体「山田さん」について、「初めて会ったときの山田さん」「ゴルフコンペで優勝したときの山田さん」「結婚したときの山田さん」のように、複数の局面におけるさまざまな山田さんの顔を想定できるという、われわれの認識論上の経験に対応する。

(27)でなぜ定名詞句の実主語が許されるのかがこれで説明できる。(27)には時空変数付き領域 *into-the-room*(s) があり、それを舞台として生起する *amble*(x, s) という出来事がある。 $\exists s (\text{into-the-room}(s) \wedge \text{amble}(x, s))$ により、世界は時点 s により切り出された切片と化す。この働きで *my-neighbor's-frog*(x, s)もまた時点 s によって切り出された時間的切片 (=stage) となるが、これはすぐ上にも述べたように不定名詞句と同じ資格において存在量化の対象となる。だから意味論レベルにおける「個体の stage 化」は、「定名詞句の不定名詞化」を意味することになる。このために例文 (27) *my neighbor's frog* は定名詞句でありながら、不定名詞句と同じ意味論的振る舞いをする。だから存在文の実主語として許容されるのである¹³⁾。

従って *il y a* 構文に定名詞句が生じた *Il y a le Père Noël*. という文の「現前読み」について Cannings が示した分析は不十分なものである。Cannings は *le Père Noël* の存在領域が発話現場に限定されることにより、Grice の格率に違反しなくなるという点に「現前読み」が可能になる理由を求めた。「*le Père Noël* の存在領域が発話現場に限定される」という点は正しい。しかし「現前読み」が可能なのは、「発話現場」という「時空変数付き領域」の作用によって、定名詞句 *le Père Noël* が時空化された存在様態、すなわち stage へと変換され、不定名詞句化すること

がその理由である。この「発話現場へと時空化された存在様態」が、話し手の目の前にいるという「臨場性」の源泉である。

6. 「時空変数付き領域」の時制・アスペクトへの効果

ここまでは文 S がそれと相対的に意味解釈される「領域」 W_x には、時空変数がないものとあるものの二種類を想定するのが妥当であることを見た。領域に時空変数が付いているときには、「世界」を時点 t_x において「切り出す」働きをし、同時にその領域に含まれる個体 (individual) も時間軸に沿って切り出して stage レベルの存在へと変換する。このように切り出された stage は、時間軸上で t_x に存在量化を受けることになる。

「時空変数付き領域」はこの「切り出し」操作を通じて、定名詞句をあたかも不定名詞句であるかのように振る舞わせたが、その効果はそれだけではない。ここでは時制と動詞のアスペクトへの波及効果を見てみたい。

Lakoff (1987) は一章を英語の *there* 構文の詳細な分析に当てており、その中で *there* 構文を大きく次の二種類に分けて考察している。

Deictic : *There's Harry with his red hat on.*

Existential : *There was a man shot last night.*

ここで deictic と呼ばれている直示的 *there* 構文は、本稿で「時空変数付き領域」とした領域を持つものに対応し、existential と呼ばれている *there* 構文はおおまかに言って時空変数のない領域を持っている。また Lakoff は deictic では *there* は *here* と交替可能だとしている。そのうえで Lakoff は次のふたつを比較する。

(29) a. *Here comes Harry.*

b. *Harry comes here.*

(29)a. は直示的 *there* 構文で、(29)b. は普通の主語を持つ構文である。ここで動詞 *come* の時制に注目しよう。(29)b. で動詞 *come* の置かれている現在時制は、「習慣的現在」で、「まさしく今現在」という時間軸上の一点を指すことはない。これは英語の現在時制の価値についてよく知られていることである。このため (30)b. の示すように、習慣的に何度も出来事が生起することを意味する *from time to time* と共起する。一方、直示的 *there* 構文である (29)a. では *come* の置かれた現在時制の価値が違う。こちらは習慣的現在ではなく、「まさしく今現在」という時間軸上の一点を指す。このため (30)a. の示すように *from time to time* と共起できない。

- (30) a. *Here comes Harry from time to time.
 b. Harry comes here from time to time.

ふつうは習慣的現在しか表わさない英語の現在時制が、なぜ (29)a. では例外的に「まさしく今現在」という時間軸上の一点を指すことができるのだろうか。Lakoffはこの事実を指摘するに留まり、その理由を説明していない。これは直示的 *there* 構文が持つ「時空変数付き領域」の働きによる「切り出し」効果で説明できる。

「時空変数付き領域」は、時間軸上において世界を時間的切片に切り出すのだが、その結果、その世界の切片に含まれたものすべてを切片化する。切片化されるのは個体 (この例では Harry) だけではなく、「行為・動作」もまた同じ作用を受ける。この効果が動詞時制に及んだとき、普通は習慣的現在を表わす英語の現在時制が、領域による「切り出し」効果によって「まさしく今現在」という時間軸上の特定の地点を指すことができるようになる。定名詞句が不定名詞句化して存在量化されると平行的に、習慣的現在もまた存在量化されて時間軸上の特定の地点を表わすと考えられる。

これと似た効果は動詞のアスペクトにも見ることができる。本稿の第3節で述べたように、動詞句内存在文では「存在・出現・状態変化」などを意味する非対格動詞しか許容されないが、動詞句外存在文では非能格動詞も許容されるという違いがあった¹⁴⁾。次例の *swim, run* は非能格動詞で、(31)a. (32)a は動詞句内存在文、(31)b. (32)b. は動詞句外存在文である。

- (31) a. *There swam a man in a red wetsuit towards the party of tourists.
 b. There swam towards the party of tourists a man in a red wetsuit.
 (32) a. *There ran a grizzly bear out of the bushes.
 b. Suddenly there ran out of the bushes a grizzly bear.

なぜ動詞句内存在文では許されない非能格動詞が、動詞句外存在文で許されるのだろうか。Levin & Havav (1996)は「非能格動詞に方向を表わす句が付加されると非対格動詞になる」と指摘している¹⁵⁾。*swim, run* のような非能格動詞は、Vendler の分類で言うと *activity* に相当し、単調継続 (*monotonous*) で非終結相 (*atelic*) である。ところが文中に方向を表わす句があると、それが動作の終点を示すため、単調継続が破られて終結相 (*telic*) を持つようになる。このために非能格動詞でも、方向を表わす句があると、非対格動詞のような終結相の振る舞いをするようになる

説明される。

しかし、この説明は不十分である。(31)a.(32)a. が示しているように、動詞句内存在文では、たとえ文中に方向を表わす句 *towards the party of tourists, out of the bushes* があっても非能格動詞は許容されない。だから存在文に関する限り、方向を表わす句の存在は、非能格動詞を非対格的に振る舞わせるための必要条件ではあっても十分条件ではない。

存在文では方向を表わす句が、実主語の指示対象の談話への導入より前に領域の設定を行なっていることが必要である。例えば(31)b. では *towards the party of tourists* が「一群の観光客のいる所へ」という局所化された領域を指定する。すると非能格動詞である *swim* は、本来の単調継続・非終結相という特性を失い、どこか未指定の場所から、方向を表わす句の設定した局所化された領域内への移動を表わすようになる。局所化された領域の画定する境界線を越える移動は、意味的には終結相 (telic) であり、領域内にいる観察者から見れば、外部からの「出現」と認識される。その結果として、本来非能格動詞である *swim, run* なども、「出現」を表わす非対格動詞と同じ意味解釈を持つようになる¹⁰⁾。これが動詞句外存在文では非能格動詞が例外的に許容される理由である。

7. 「領域」の移行と多重設定

本稿の最初に見たように、*The professor is drunk.* の定名詞句 *the professor* について Russell の提案した「唯一性」に基づく論理式を、何の限定もなしに適用すると偽になってしまう。世界中で教授は無数にいるし、ある特定の時点で酔っている教授も大勢いるからである。従って、*the professor* がそれと相対的に解釈される「領域」はこの世界全体ではなく、文脈的・語用論的に限定された局所的な「領域」でなくてはならない。

ところがこの分析には、次の例をもとにして反論が試みられてきた。(33) は Lewis の例、(34) は McCawley の例である (Lewis 1979)。

(33) *The pig is grunting, but the pig with floppy ears is not grunting.*

(34) *The dog got in fight with another dog.*

もし局所的領域において(33)の最初の *the pig* が唯一性条件により *the N* となっているとすると、同一文中でさらに *the pig* により別のもう一頭の豚を指示できるのはおかしい。全体として領域内に豚は二頭いることになり、唯一性条件は満たされていないからである。(34)も犬は実は二頭いるので同じことが言える。

Lewis (1979)はこの観察をもとに、定名詞句 the N に Russell のような「唯一性」条件を認めず、代わって「卓立性」(saliency)という概念を提案している。the N は当該の文脈・状況において最も卓立した N を指すというのである。

しかし Lewis の観察はまちがっている。(33)で the pig with floppy ears がもう一頭の別の豚を指すことができるのは、修飾語句 with floppy ears が付いているからである。これを取り去るともう一頭の豚を指すことはできない。

(35) * The pig is grunting, but the pig is not grunting.

もし(35)で二番目の the pig がもう一頭の豚を指すことができるなら、McCawley と Lewis の主張は根拠を持つものとなる。しかし事実はそうではない。

では (33) (34) はどのように説明されるか。Recanati (1996)は Lewis (1979)に反論し、定名詞句がそれと相対的に解釈される領域は、文あたりひとつとは限らず、談話文脈・発話状況などの要因に応じて、複数の領域が関与することがあるとする。(33)は最初「一頭の豚を含む局所的領域」 W_1 から出発するが、文の途中で領域の移行 (domain shift)が起き、別のもう一頭の豚を含む領域 W_2 が導入される。最初の the pig は W_1 において唯一的であり、the pig with floppy ears は W_2 に関して唯一的である。Recanati は領域の移行は次例のように連続的に起きることもあるとする。

(36) Since it was stuffy in the house, Mary went up to the attic and opened the window.

最初の W_1 は一軒の家 (the house)を含む領域である。the house は W_1 において唯一的である。次に went up to the attic という出来事の記述により新たな領域 W_2 に移行する。 W_2 は $W_2 \subset W_1$ の関係にあり、attic をひとつ、そしてひとつだけ含むような領域である。次に opened the window により新たな領域 W_3 が導入されるが、the window は W_2 や W_1 ではなく W_3 と相対的に解釈される。これが Recanati の分析の概要である。

新たな領域はどのような処理過程を経て談話の中に設定されるのだろうか。この問題に答えるには、話し手と聞き手の相互行為 (interaction) としての談話の構築と処理全般のメカニズムを考えなくてはならない。その全貌に迫るのは本稿の紙幅では無理なので、ここではその一端を示すに留めたい。問題を領域と定名詞句の関係に限定すると、Lewis (1979)の「前提の調節」(accomodation for presupposition)が発動されると考えられる。

(37) If at time t something is said that requires presupposition P to be acceptable, and if P is not presupposed just before t , then - *ceteris paribus* and within certain limits - presupposition P comes into existence at t . (Lewis 1979 : 340)

この原則により、Since it was stuffy in the house... という発話断片を処理する聞き手は、この断片が真となるために前提の調節を行ない、the house の指示対象をひとつ含む領域を設定するのである¹⁷⁾。デフォルトでは世界全体である解釈領域が、前提の調節により局所化され、「領域の絞り込み」が起きる¹⁸⁾。これが一連の領域の移行 (domain shift)を生み出すと考えることができる。

しかし Recanati は気づいていないようだが、以上の分析にはひとつ問題点が残る。それは例文(36)で W_1 では the house の唯一性が成り立ち、 W_2 でも the attic について同様だが、 W_3 では the window は必ずしもひとつでなくてもよいという点である。屋根裏部屋に窓が複数あっても、(36)は自然な文である。従って、定名詞句の意味解釈を、「個体としての唯一性」のみで説明しようとする分析には無理がある。この問題を解決するには、認知的フレームの中での対象の浅い同定という考え方が必要になるが、紙幅が尽きたので詳しくは東郷(2001a)、東郷 (2001b)を参照されたい。

8. おわりに

本稿では談話の構築と解釈の処理過程において、領域 (domain) がいかに重要な役割を果たしているかを論じた。領域は *In 1929, the president was a child.* の前置詞句 *in 1929* のように文中で明示的に表現されることもあるが、多くの場合暗黙のうちに前提とされている。談話とは、話し手と聞き手の相互行為として、時間軸に沿って局所的に構築・処理される累積的な心的表象 (mental representation) である。聞き手は談話処理に当たっては、発話された文の最適解釈を求めるという協調原則に則って、文を真とするのに必要な領域を設定したり更新したりする。この意味で Lewis (1979)が言うように、私たちの談話構築と解釈は、話し手と聞き手というプレイヤーがその場で一番強いカードを出し合う「言語ゲーム」 (language game) なのである。

最後に本稿で考察した領域に関して、さらに有効に適用できる問題のいくつかを指摘しておきたい。そのひとつは *J'ai vu Paul qui pleurait.* のタイプの知覚動詞を用いた擬似関係節構文である。この構文では *j'ai vu* という特定の時制に置かれた知覚動詞が、「私の知覚領域」(つまり私が見える範囲) という領域を設定し、擬

似関係節 Paul qui pleurait はその領域と相対的に解釈される。これにより問題のタイプの擬似関係節の制約を説明できる。ひとつだけあげると, *habituellement*, *généralement* のように習慣性・一般性を表わす副詞句との共起制約がある。

(38) **Habituellement / Généralement, je le vois qui prend le bus.*

これは知覚動詞が切り出す領域の一回性と、副詞句の習慣性・一般性とのミスマッチが原因である。

本稿で言う「領域」と深く関係するもうひとつの問題は Roberts (1989) の modal subordination である。

(39) A thief might break into the house. He would take the silver.

二番目の文のモーダル助動詞 *would* が持つ「必然性」という価値は、あらゆる世界において有効なのではなく、一番目の文が設定する「この家に泥棒が入る」という可能世界においてしか有効ではない。つまり *would* はその有効範囲を制限されている。Roberts はこの現象を modal subordination と呼んだが、すぐにわかるようにこれは本稿で言う「領域」の問題と重なる。このように領域は本稿で扱った名詞句の解釈だけでなく、他の言語現象にも深く関わっているのである。

【注】

- 1) もちろん she を Rosa 以外の人と取れば(5)b. は非文ではない。
- 2) この「世界」のちがいは、Fauconnier のメンタル・スペース理論では、スペースのちがいとして表現されている。メンタル・スペース理論では、「現実スペース」「信念スペース」「絵画スペース」「過去スペース」などが提案されているが、本稿で扱う「領域」は、スペースよりも微細な談話領域をさす。このために本稿では、概念の混同を防ぐためスペースという用語を避けている。
- 3) "Let us say that the hearer is seeking to interpret the domain of relevance to which the sentence pertains. This involves in part interpreting the domain of individuals over which the definiteness operator ranges." (Cannings 1978 :75)
- 4) (9)の定名詞句の解釈規則は、 $le N$ は N であるようなすべての個体を指定しており、定の意味を全称量化と同一視している。この同一視には理論的・経験的な問題があるが、ここでの議論には直接関係しないので問題としない。
- 5) 「リスト文」については Rando & Napoli (1978)を参照。
- 6) 実は事情はもっと面倒である。もし "Il y a le Père Noël." の定冠詞が、発話現場を領域とする D_k と相対的に解釈されたとすると、 $D_k = D_w$ となり同語反復に陥ってしまう。だから le Père Noël の定冠詞 le は、 D_k ではなく最大個体領域 D_w と相対的に解釈されるのである。従って、"Il y a le Père Noël."の意味は、「最大個体

領域 D_w において唯一の存在が前提とされているサンタ・クロースが、どんな事情からか、今日の前の発話現場の個体領域 D_k に含まれる」となる。文 "Il y a le Père Noël." を S とおくと、文 S 全体は $\langle S, D_k \rangle$ というペア解釈を受けるが、名詞句 *le Père Noël* は $\langle NP, D_w \rangle$ という解釈を受ける。このように、文とそのなかに含まれる名詞句の解釈領域が食い違う現象は、Cannings の提案した理論装置のなかでは解決できない。この解決のためには、Carlson (1977) が提案した *kind/object/stage* という存在論が必要となる。

7) この点に関して久野・高見 (2002) は、「意味上の主語が文中に導入される時点で、その主語の指示対象の存在か出現を示すような叙述がなされているかどうか」(p.51) が、存在文の容認度を決める要因だとしている。

8) *Wellington defeated Napoleon.* は過去時制に置かれた一度きりの出来事を表わし、述語は局面レベル述語である。しかし、本稿の分析が正しいとするならば、問題の文はこれを *here (=Waterloo)* の習慣的特性として記述するのだから、個体レベル述語として扱っていることになる。このように一度きりの出来事が、その場所を永続的に特徴づけるという現象がどのようなメカニズムによるのか、現在のところ定かではない。

9) スペース導入表現のなかで、*in 1928* のように明示的に時間指定を含むもの、*in my youth* などの時期を表わす表現については、時間指標があるという反論が出るかも知れない。しかし、本稿で時空変数と呼んでいるのは、時間軸上のさらに細かい時間指定であり、この反論は有効ではない。*In 1926, the lady with white hair was blonde.* では、「今では白髪の夫人が金髪であったこと」は、1926年という時間幅の全体について真であることを述べており、1926年の中の特定の時点について真であると述べているのではない。もちろん1926年全体について成り立つことは、そのうちのどの時点を取ってみても成り立つのだが、このふたつは同じことではない。

10) だから本当は *here* を存在量子子のスコープ内に置く必要はないので、外に出して *here* $\exists s \exists x (\text{storm}(x, s) \wedge \text{arise}(x, s))$ と書いても同じことである。

11) *There arose a storm here.* のように、場所句が文末にある動詞句内存在文の場合は、*here* が時空変数を取る解釈と取らない解釈の両方があると考えられるが、ここでは詳しくは論じない。

12) Carlson の定義する実現関数は次の式で与えられる。上付きの k, o, s は、*kind/object/stage* という存在レベルの違いを表わす。 $R(x, y)$ は *kind* から *stage* への実現関数、 $R'(x, y)$ は *kind* から *object* への実現関数である。

$$\forall y^k \square \forall x^s [R(x^s, y^k) \rightarrow \exists z^o [R'(x^o, y^k) \& R(x^s, y^k)]]$$

13) 動詞句外存在文で定名詞句の実主語が例外的に許されるという現象には、今までに多くの説明の試みがなされてきた。Milsark (1974), Guéron (1980), Newmeyer (1987), Lumsden (1988), Rochemont & Culicover (1990), McNally (1992), 久野・高見 (2002) などを参照。しかし、その多くは統語的説明の試みであり成功したとは言えないものが多い。本稿のように *stage* という概念を用いて「定名詞句の不定名詞化」をその理由とする研究は今までには見られない。

14) 久野・高見 (2002) では、動詞句内存在文でも非能格動詞が許容される場合があ

るとする主張があるが、ここでは考慮しない。

15) "agentive verbs of manner of motion are unaccusative in the presence of directional phrases" (Levin & Havav 1996 : 186)

16) 日本語では補助動詞の「～テ来ル」が同じ効果を持つようだ。「男が走った」と「男が走って来た」を比較すると、後者は話し手のいる場所への移動を表わし、視界の中への出現と解釈できる。領域のひとつの性質としての「話し手のいる場所」という点については、Lakoff (1987)が Here comes Harry. の場所句 here が Harry の移動の終点としての話し手の位置を表わすとしている。また久野・高見 (2002) は、「there 構文は、意味上の主語の左側の要素が、話し手 (または話し手が自分の視点を置いている登場人物) にとって観察可能な存在、非存在、出現あるいは非出現を表わすと解釈される場合にのみ、適格となる」という制約を提案していて、移動主体が話し手の視野に入ることが必要だとしている。この「領域における話し手の位置」は別途考察する必要がある、本稿では問題の所在を指摘するに留める。

17) この分析は、定名詞句の本質は指示 (reference) ではなく、存在前提(existential presupposition)であるという主張を前提としている。筆者はこの立場に与するものだが、ここではこれ以上触れない。

18) これとほぼ同じことを Renaud (1996)は「領域閉包」(domain closure)と呼んでいる。

【参考文献】

- Cannings, P. (1978). Definiteness and relevance : the semantic unity of *il y a*. Suñer, M. (ed.). *Contemporary Studies in Romance Linguistics*. Georgetown University Press. 62-89.
- Carlson, G. (1977). *Reference to Kinds in English*. Ph.D. dissertation. University of Massachusetts at Amherst.
- Guéron, J. (1980). On the syntax and semantics of PP extraposition. *Linguistic Inquiry* 11. 637-678.
- Lakoff, G. (1987). *Women, Fire, and Dangerous Things*. The Chicago University Press.
- Levin B. & M.R.Hovav (1996). *Unaccusativity*. The MIT Press.
- Lewis, D. (1979). Scorekeeping in a language game. *Journal of philosophical logic* 8. 339-359.
- Lumsden, M. (1988). *Existential Sentences. Their structure and meaning*. Routledge.
- McNally, M. (1992). *A Semantics for the English Existential Construction*. Ph.D. dissertation. University of California at Santa Cruz.
- Milsark, G.L. (1974). *Existential Sentences in English*, Ph.D. dissertation. MIT.
- Newmeyer, F.L. (1987). Presentational *there*-insertion and the notions 'root transformation' and 'stylistic rule'. *CLS* 23. 295-308.
- Rando, E. & D. Napoli. (1978). Definites in *there*-sentences. *Language* 54. 300-313.
- Recanati, F. (1996). Domains of discourse. *Linguistics and Philosophy* 19. 445-475.
- Reinhart, T. (1983). *Anaphora and Semantic Interpretation*. Croom Helm.
- Renaud, F. (1996). The definite article : code and context. *Journal of semantics* 13. 139-180.
- Roberts, C. (1989). Modal subordination and pronominal anaphora in discourse. *Linguistics and Philosophy* 12. 683-721.

Rochemont, M.S. & P.W. Culicover. (1990). *English Focus Constructions and the Theory of Grammar*. Cambridge University Press.

Russell, B. (1905). On denoting. *Mind* 14. 479-493.

久野すすむ・高見健一 (2002). 『日英語の自動詞構文』. 研究社.

東郷雄二 (2001a). 定名詞句の指示と対象同定のメカニズム. 『フランス語学研究』 35. 1-14.

東郷雄二 (2001b). 定名詞句の「現場指示的用法」について. 『京都大学総合人間学部紀要』 8. 1-17.

東郷雄二 (2002). フランス語の不定名詞句と総称解釈. 『京都大学総合人間学部紀要』 9. 1-18.